小栗外傳

三

へ13
3919
3

へ13
號3919
巻3

寒燈夜話 小栗外傳 巻之三

東都 絳山歗醐陳人戲編

第五編

藤代川ゐ小栗良粥を乞ふ
築波山ゐ風間明主ゑ遭ふ

且説小栗判官代助重ハ君父の爭ゐよう。采邑常陸國の賊徒討ゑと道所急ひぐゆりける。日あらぶして常陸の國茨代川ゐ到る。此川ハ東西名高き大川なるに折しも秋の液雨ゐ降り。白波るく漲れゝ。卒忽ゐ渡るべきやうなく。四方ゐ人を遣て私を索ゝ。當時對の岸ゐ大勢の人ゑ。一艘の渡舟あり。目今此方の岸とさして漕来ねゝ。光景ゐれゝ。待うけて乞る処ゐ遥かなれ共。一人の少年。声高く揚て船ゐ呼うけ走せ寄りしゐ。船ハ岸より二間ばかりも漕出ー。たるゝ。少年身を躍ゐし舟の表ゐ

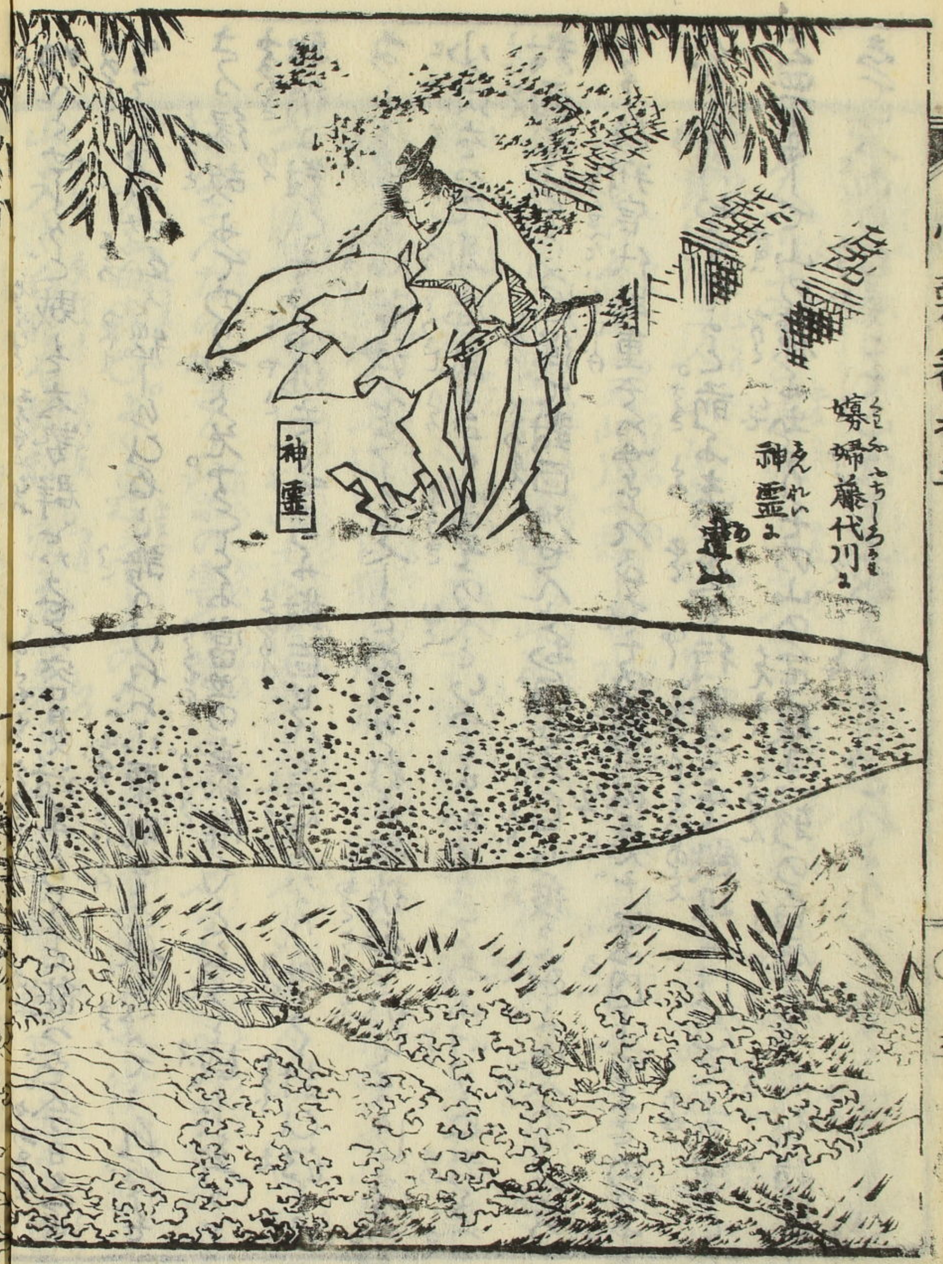
孤舟の客に成て六人有時のいろゝ〻しげうゝ。山伏の。金剛杖を螺貝を持て。
毎緊ふ腰うちかけて居うりこが。少年孤舟を拍子よ。山伏ぐ法衣の袖よ服見
の柄とかけてぐり。山伏怒り腹うち。這小冠者りつなる人なりぐ。斯言れて
一言の謝ともものべざるいまぐ白痴うりと罵れば。少年ハ回意ぐもせで双
眼を閉眠がごとくして居うり。山伏ますく怒り。金剛杖りて撃んと。
その時少年眼を瞋らし山伏ぐ睨むに。髮空うるに拔て怖ゝさいうんうさ
ゝ。舟中の人々ぐ失ふ。山伏ぐ怒るひく。今剛杖を捨て。ゝ居く流れ
うり。皆懼まて少年ぐ着るりの。舟梢も棹ぐ拔て戦く居れば。舟ハて
流人ぐうるゆぞおるまこうぐうふ漕て行る這方の岸よ着うり。少年ハ舟を
陸よ昇り。仍方ともおく急ぐ去りね。小栗助手ぐ。先刻りの光景とうち
こそ居うりぐ。少年の勇悍孟賁よ似うりしぐ。ふく感嘆て居ぐ

うりぐ。今の世かゝ由勇者もありけるりのうゝ。かゝのりの臣とせぐ君の
はんぐ大事のに用ゆも立べうれ。いうゝもして召抱んりのとと。家の執権池乃
庄平とつふぐ近づけ。已がそふふもとと笑へ知ぐしゃぐ彼が身の上と笑べと
ゆるゆ。庄平ぐ沼ぐ松梢よ對ひ。目今の少年ハいうゝりのぞく問れハ。
松梢答りうぐ。彼少年ハ此邑のりのて。名ぐ少弥とゆりのうり。
今年ゆゝく十七歳力めくまぐ法く。孝義ありのて侍なり。彼が母ハ嫠
なりぐ。一夜此夜代川の深をうつふ神人ゆ行遭うり。神人のりの我今渉
家ふ行人とうふ。此地よ遭ふこそ幸なり。汝が胎内と借して汝ぐ生まうよと。
いふりと思べ其形をゝぐうりぬいと不思議のことふ想ひおまうりたぐ
なゝぬ身となり。十三月ゆて小弥ぐを生り。夫ゝ生ぐ子なれば世の笑へ
をも恥ふ。蛮ふ山よ捨ゝ。熊胥負ひまて返ゝね又川ゆ投まぐ溺まぐ。

それ唯くよめふぶと経ふ若ひしに。生立みもちぐひ力強く。まぐ成童ふも満ざるふ川ふ入くくへ漁猟し。山ふ入くくへ木撫柴苅と。尋常の人の三人四人しく做業をたぐ一人してなくふ。なかしれ色も白。彩ふ近比此邑ふ白狐有り。人をとり食ふふ。又此川ふ悪しき水虎住く。人を弱し食ふ。それさ人患ひ怪くふ。去年より近国群盗蜂起し。此邑も賊の為ふ侵されつるべ。邑人ふ是ふ堪へぢ。財宝沢運び他郷ふ移す。賊難を避んと絶まぐふ。小栗をこれを[illegible]。母ふ語てつふ近比白狐と水虎と群盗と。三ツの害あり。此邑静盗うふぶ。其此邑ふ生れ此土の稲粱を食ふて人となるつ。ぬで此難を他ふ[illegible]さん。力のかぎり此ふの害を除んとらひそぐる。此るれ免されあるべ。こよひふ母去ひ。よくも考へしものかな。と免しろほどふ。小栗を嘆しく。先山ふ入くく白狐を斬殺し。次ふ川ふ入くく水虎を撃殺せ。まより盗賊を

如人とせーうと賊を大勢群とかせん容易ふ手らぐこと能ふぢ。今日ふも[illegible]ふ。小栗助をこれをへてゃれぐそ。[illegible]ふ。母去ひ。と語りければ小栗助をこれをへてゃれぐそ。さる縁故ふてありつくえ。ととふ富豪の豪傑ふとふく感じ。ぐふ[illegible]捐ふ對ひ。その小栗をとふ富豪ふ對面せんと想ふなり。汝よく計ひ[illegible]。[illegible]多くの心苦浅をとぐ[illegible]とありふ私捐ふ[illegible]。小栗をへ来志氣ふく。富豪の人とふ[illegible]。對面とふ[illegible]。自ら彼ふ家ふ入ふ[illegible]。とふ[illegible]判官代助重その母ふ[illegible]。その家ふ彼處ぞ安内ーてよこあるふ。ひぐふ[illegible]。前ふ立て進ふ行。助重ふ[illegible]。三四丁ふーて山の麓ふ出ふ。その山の[illegible]腰ふ一軒の白屋あり。私捐指ふ[illegible]。白屋とて小栗ぞ家ふ付ふ。これより[illegible]往ふ。

孀婦


神靈
孀婦藤代川
神靈

慇懃ふ乞ふ。ゆゑ尋ねて旨ふ従ひまさべしといふ。助重は喜び勝ち
案内まうるぞとて。松梢ふい渉を分け。苦労を謝して帰らしけり。さて
供人をば庭ふ残し。少弼左ふ勝ふべき幣物を一人の下僕ふ齎し。池
庄平とのゝ石倶し。山の半腹ふる白屋をさして攀上る。その門邊ふ到り。
家程の光景を窺ふふ。一人の老女。爐の辺ふ苧ふ績て居まる。その時
庄平門扉ふ叩て音ふ入べ。老女苧ふを止めひく生まる。小栗主従の体
を窺ひ不審げふ問ふ。誰人ぞ。こゝ迄ふ来ふとは。庄平云
これは遠倉方のものゝ。少弼を主ふこゝまりやと問へどさんい少弼ぞ
家ふこれまで伴ふ。ふ平ふ人とともば。そも何ものぞ
とて出ふうきふふや。男児少弼ふ今朝伊方へ出行ぞ。いまだ
家ふ還らずとふ。庄平老女ふ少弼ぞ。世ふ遠くあり

ぬるよ。我主小弼太ふに対面しあうんとあるを。其還ふ行さしのべとの
老女ふ肯ひ。ふ平ふ白屋も厭ひのつぞふ。這裡ふ入せのやと一間ふる
処ふ請し入れば。小栗主従喜び。老女の案内ふ従ひ一間ふ入り。四壁紙
顧望ふ。山猟川猟の具ふ懸ふ。ふ平ふ中ふ東なる窓の下ふ文机ふ。其
上ふ多くの書どもを積ふ。主従ふこれを見て。されば此庵人
ふ学ふ。とうち語らふ時ふ老女茶を汲て主従ふ勧へ。男児
ふ何の用ふ来ふと不審ふ。庄平うち笑ひ心を知ふ。
今日這般ふ来ふ。我君その勇猛なるを感じ。因を結ひ。
ふ来ふ。我君ふ今遠倉ふ近ふ。小栗判官代助重とは。
斯ふ人ふ。我主ふ仕へる。主を勧へ。
我主ふ。老女ふ判官ふ助重ふ宣ふ。

小栗満重公の公達小次郎君にてましますぞや。庄平その小次郎君を携し
まひ判官代助重とハ名を変じしものぞ。老女ハ喜びさそハさつるおはしつる
ゆゑ。豫て小次郎君の優るゝ文武の道に長るも。湯倉一の少年なりと。此
國まで聞えし男児小弥太これを慕ひまゐらせ。おのれ仕官するならば
此君なるぞ主と頼まずと。生平なりしが。今日も還り給ふが。さてこそ
喜びに堪ねんと。雀躍して喜べハ。小栗主従密かに喜び合ひ。いぞいの
方に人の来るけはいをはなぞ。老女ハ一間の外に立出しが。忽ち声を高らか
に。我子いまに還りの遅かりし。平日に慕ひまゐらしる小栗小次郎君の
こゝにはしまするぞと。老の心のせはしくて。立から待ちかねしに。小弥太
跪ひて。かゝる今日ハ思ひの外に時を移し。母人の心を煩はしぬ。侍りの罪
と述終り。目今宜しからぬを疑はしめぬ程ど。小栗殿の公達いかで我白屋
に伴うるあらんと不審きは老女のみなど作りとせらん。這裡に来りし事
に入りし人と誘引に小弥太一間の座に入て。小栗助重の容を窺ふに眉清く
眼秀て。骨相英雄の人と見えれバ。是なん小栗に相違なきと思ひ。此
恭しく平伏してまゐらせなり。貴人の何事ありてか
茅屋にはゐらせありしとのべられバ。庄平進を出て我主にハ我主前刻に。
足下一滞にはいその様子をうかがひ。其勇悍のほど知蔵したうれ
来りて因を結んと志すにぞ。我主助重こゝに来りますなり。去年
より東國の所々群盗蜂起し。正民を悩ますを大かたならず縦
征しまゐらせんと。諸大名に命せて其所領の賊を討しむるに。我主君も其命に
より。釆邑當國多気の庄に下りたまへ。去りしに足下が勇猛の名代
に及ひたる勇士を今の世に空く田野に埋しめん是非に主君さんがら

まゐり。幣をもりて呈下をむかへんとて頻くハ我主を助けまゐらしてんやと宣へる。助重も倶よ云我劉先主ハ仁義をもて世に聞こえ給ふ。汝武候の智勇をもて助け給ふ。小孫太母が顧ゆ[illegible]こハ冥加の命と思ふ。僕豫てより君の英名を慕ひ仕へんとハ思ひ[illegible]ら母を送ふべきものなれ。奈何とも詮なく。今日まで宿志を果さずいたづらに不図君にてあるこそ[illegible]せまひ。[illegible]入るのこころハ妄能の身を抱へんと宣ふと命が兼ることゝ。[illegible]ハ速ハ清[illegible]。[illegible]ふ従ひこふらせんとハ思ひたれど。前ハもやうこと。母を送ふ人[illegible]ばいと畏れど。今ハおぼを旨ふ従ひ[illegible]ふ[illegible]せ[illegible]ど。ぞて時ハ[illegible]ハ汝家ハまゐり。犬馬の労を助けまゐらせんと恭敬でのべ[illegible]。[illegible]射老女傍ようとゝみ出て発機のことを附を失ふべ[illegible]ば。汝年日暮ひなる小次郎君のこゝろ

を抱まゐらんと宣ハ[illegible]ば[illegible]て辞こなる。ぞて人の親ゝるゝ。我子のうへハ。さゝやの福あるこたハ嬉しくて。雲井ハ昇るこゝろぞとれ。ひて汝ハ土民より人の上ゝる武士ハ発達浩福をいうで嬉しと想ハざるやや。母の羈ハ[illegible]されて優曇華なるふね身の運の開く機会を過ハいと愚なりと[illegible]ふ。庄平さへさこみ出。斯母人も免しあり何うハ細のあるべきぞ。ハさゝやの[illegible]れども我主君よりの幣物ぞと。金作の太刀一口ハ。芝金一包ハ[illegible]人。小孫をば前ハさ重けば。小孫をい親の訪ゝさ人ハ。君と新人判官が[illegible]ばきハ[illegible]ハ。感ちの涙浮べ。深く恩義を謝し終り。母ハ賜物[illegible]ハ。老女ハ感涙せきあへぞ。たゞまと合一手一拝。涙と越ぞこゝ[illegible]ハ。賤き土民を抱まゐらとの冥加ハ[illegible]。[illegible]きハ恵の賜りのハ礼をもいたゝ[illegible]。今君のあゝよりかく武士となりたゝ[illegible]ぞ。それ〳〵の性をも[illegible]ぶべ[illegible]れど。老女が

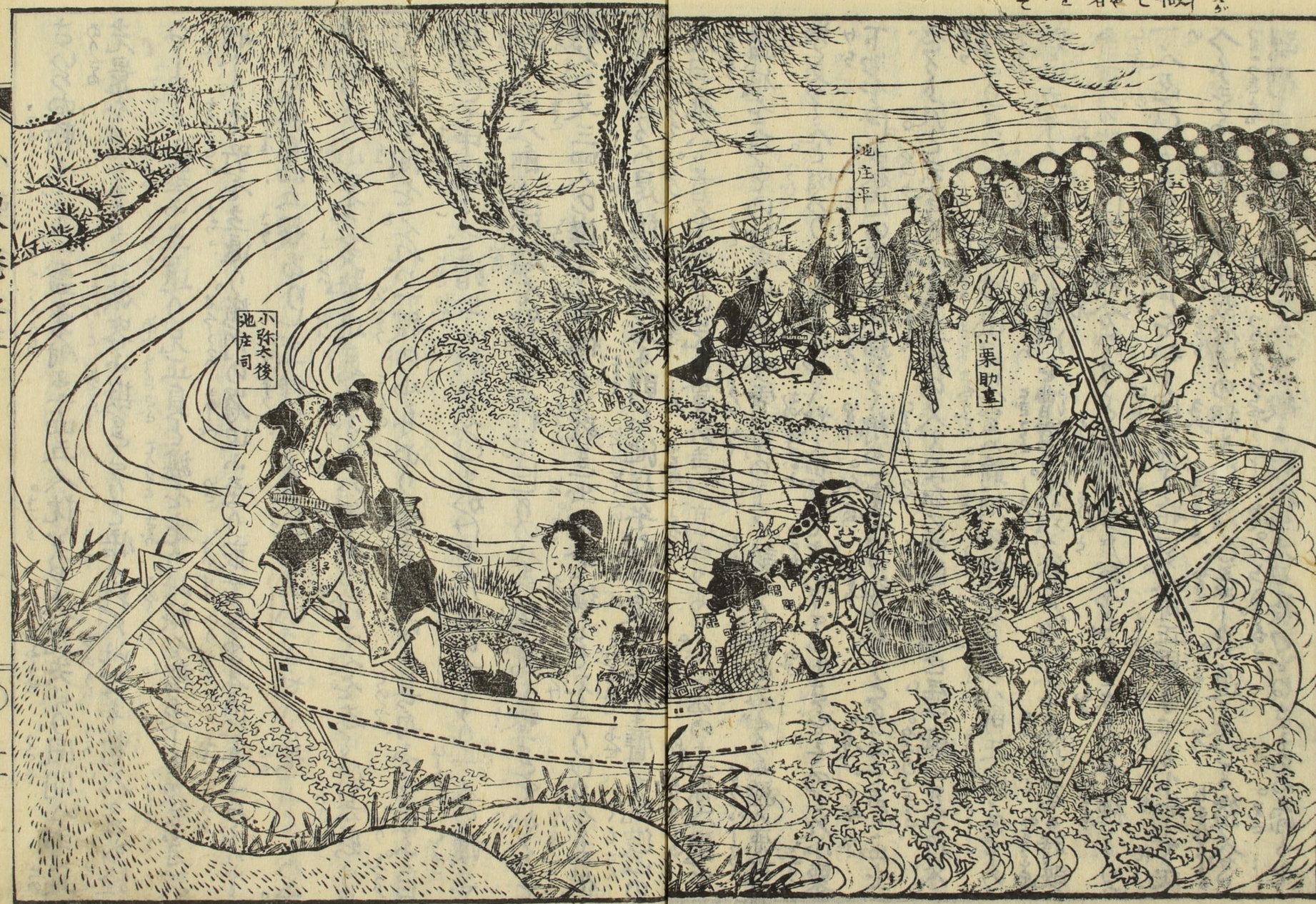
久家八代く土民ゐて甚性何といふを尋ぬるに。此上の恩ゐさりねぐき氏を結ひなんやとゝはゐで助重実道理なり。武士として氏なくもいぶなり。幸ひこれある池庄司ハ我家ゐおゐて累世一の老僕なり。いまゞ子も形きとゐれば。今日より彼が猶子となり。其氏を侵ゝ又庄司の一字ゝ。つぐ諱の一字ととりて。池の庄司助長と名ゐべし。人くいふゐとありけれゐ。庄司ととゞゐ小弥を母子も助重が残ろくこなる命に伏。こゐありがくき命ゝと感佩ゝて喜びろり。生付老女ハ厨のかくゐ退出ゝ。忽ち跳子土器持出君臣ゝゐのんとゐハ。盃を賜ふとゝゝど。賤家のゝびゝらゐハ。ちぐゝし此器もなし。矢ゝれど此土器浄ゝれどこの濁醪。いと畏ゝれど此土器。男児ゐ賜りのくしと助重が前ゐ居ゝ。けば小栗ゝよなく喜びいとも。ちくふのゝとこの濁醪を酌ゝ。君臣初對面の礼を整へり。尚その序をもて。庄司庄司と親子の義を結ぶ因の盃ゝろせば。主従貶子四人が結びまる比ゝ。此付庄司云ゝ。ハ今此邑ゝ侵ゝ盗賊も。君の所領を侵ゝ盗賊もこれこる一般の賊なり。某此邑人の為ふ。この賊を逐退ゝとる志まゐれど。一人の力ふ及び難きとりて。いまゞ甚事を果ゝど。君賊を退治ゐのんとゐくぶ。某なるべき謀ありとゝゐふ。助重ハ此国ゐゝ。ゐて下り土地の案内ゝ知ぶれば。公憂ゝとゐろひ。庄司賊を討の術ありとゝゐふ大ふ力ゝ。ゐ。そハゝ奈何なる謀ゝ詳ゐひ教ゝとあるゐ。庄司膝をゝゐて。這般ゝの事にゝぐりねゝ。さゝゐきれば。判官も庄司も限りなく喜び。さゝぶ甚謀を用ゐべゝ。藤ゝ。ゐ人さゝゝれ士卒を以上。その手配を色ゐる。此池庄司ハ則足新田十人の殿ゐの一霊再生ゝ。過世の因縁ゝゐて。判官代助重ゝ。君臣の我を

とゝふ結びるこゝに當國筑波山ゐ兄安の強盗ありゝ。兄とび風間次郎正貞といひ。弟とび風間八郎正國と云ゝり。年僅ゐ十七と。十六なれど。智勇あゝまでありゝれわどに。絶ゐ盗賊の大將軍となり。手下多くありて常陸の國の盗賊へ。こまへこれが下知ゐ從ひゝり。筑波山の東ゐる藤くゐ。橋川といふあり。此流れの末へ名ゐ一ゐの川ゝ其川を隔ゝる岸ゐ一軒の旅亭ありこれへ風間兄弟の手下の賊ゐて。鹿六といふ者ゝ此所ゐ旅亭をあらゝ。旅人をゆどゝ。財宝多く持ゝる旅客ゐれば。密ゐ小舟と走ゝ。筑波山ゐ告知ゝ風間を呼びて。賊宝ゐ奪ゝとゝ。されどその事常ゐ無せと。只福者の宿りしとれのこれば。生家盗人なゐと知る者。庄司へ小栗をと云ゝ。所より賊を討んと想ゐ。ゐ用ひ賊の密謀を搜ゝ。鹿六ゐ密るゐと知るゐ。主君小栗ゐ。馬より乗ゐ。おびゝ。

牽せ。ゝと多くは長櫃ゐ擔荷ゐ。はゝしく武具金銀を入ゝ体弾ゐ入せゝ。這回鎌倉殿の命により。小栗判官代助重采邑多氣の城ゐくゐ体はしと披露。士卒とび所ゐ埋伏ゝ。侍下僕僅ゐ三十人ばかりを引俱。彼鹿六ゐ家ゐ宿りけゝ。鹿六へ小栗ゐ光景を窺ゐ。浪ゐ福者とゝければ。急ゐ風間兄弟ゐとゐ知ゝ。一人の小賊ゐ手間をゝ。筑波山の山塞ゐ赴ゝ。小賊へ鹿六ゐ命と稟。小舟ゐ乗ゝ。橋川を西ゐ出て漕行処ゐ豫て小栗の謀ゐより。此川の芦の繁ゝゐ躍ゝ居ゝる。他の庄平この舟ゐ乗ゝ。忽ち顕れ出彼小賊ゐ。ゐ云ゝ賊を捉へゝ。締殺。其衣服を剥ゝ。これを着ゝ。腰ゐ差ゝ。其舟ゐ乗ゝ。經ゐ筑波山の山塞ゐ到ゝ。鹿六ゐ出ゝ。風ゐ兄弟ゐ呈へゝ。兄弟披き開てかぎりゐゝ喜び。庄平とび鹿六ゐ下僕とゝ。尚ゐ光景を

同じく庄平回意されバ小栗ハ尋常のものとハ見えねバ敢じく酒を勧
その酔たる時を窺ひ桐圓を奪ひとるべし。太かるハ夜半ならでハ事を
做しがたし。其方ハそちらのすなとや是面に兄弟心を結ばざらんべそ
宿備をせよと手下の小賊共と偽り促されバ。庄平これを慎みて承り
甚ハ江先まで来り鹿六と示し合せまゐらすとて尋ね申べしと別れけり。
小舟にとり乗り飛がごとくに漕戻て元の芦間に繋ぎ。ひつ桐圓の封を密ひ
居りぬ。且説這程ハ小栗判官代助重池庄司と謀を織し。旅宿の主鹿六を
呼寄せて酒宴を催して居りしが。既に酔ねらんと思ふとき小栗助重庄司
に目配せければ。心得て躍り出腰の一刀ぬく手も見せず電光石火の
光と共に鹿六が首を前に落ぞ落たり。酒に酔たる女ども此光景
を見るよりも恐ろしと慌忙ければ。家内の男女これに驚き騒ぐぞ。
庄司鹿六が首を太刀の先に貫き声を高からし。此家の主鹿六こそ
盗賊をなせしものゆへありて今宵斯のごとく誅せり汝等が主鹿六が
如くならんと憚りけりれば。言なく戦き恐れて声たてず。その時小栗
下知をなし家内の男女残らず縛め一室に入おきて声を出さ
ざらしめと云含め小栗主従の人々ハ家の四面に縣き居て賊の来るを
待ちたりける。筑波山の賊風間八郎正国ハ前刻の約に手下の
賊四五十人を引卒し橋川を漕渡り鹿六が背戸のかたに忍びする時既
に三更の比なりしかば時分なりと窺ひ寄戸をとくと音のするに裡より
一人忍び出て戸をおし開きさし招けバ八郎正国手下に下知して走
入るに。小栗方ハ入口に幾條の縄を引纏ひ置しかば。走入る盗人等
跌倒まろび転べバ。小栗の兵士一般に現れ出太刀長刀を抜そばめ斬るぞ

小弥太孟賁を倒して勇を
終験者を驚もす



さいりの斬りどを一盞茅舎十四五人枕をならべ死失さう。風間八郎八山光景をみるより。こは旅客を欺きとさうと悟られば。此程を斬入るとも迚る。早く山塞を立退り。兄正員と謀を定め。此恨を報ずべしと忽ち身代捌へ一生所を立退り。福川の岸辺に至り。取敢ず舟を求めし。舟も少しさるふ。甚舟四五艘ありしが。一艘をだに人どこいうもせんと想ふところを。後脊より小栗が多勢追来るを。今ハ何とも詮さべをもつべ呆然る折ふらふ芦間をこれば一艘の小舟あり。是さいわひと其舟ふとりを。自棹さして中流まで漕出されば。忽ひもかけぬ舟板の下より。一人の漢子躍り出八郎が泫膝をかひなぐれば。ざしりの八郎。不意を撃まれかくと捌べば又三四人の漢子舟低より躍り出。押へて縄をぞをさりけり。今舟低より出さるを。是迚といふ。則ち池庄平と。甲夜に小城に賃て。紀波山の山塞に到り風間兄弟を欺き。八郎をとこへもびきは舟ようめりさを窺ひ。その舟をば残りなく芦間に隠しおきぬ。士卒四五人と共に舟低に隠れ。八郎が来るを待て。急に起て生捕しに。斯て庄平ハ八郎を率て判官代助重が前に生捕しに。助重庄平が功を賞し。さて八郎が郷をば自ら解きゆるして云へりけるハ。汝が骨相を看るに天晴當世の豪傑なり。惜るは其器量ありてなどや梁上の君子とゝなりしぞ。凡人生れながら盗をなすものに。渾是良家の子弟なる。況舟の放湯より寄るかなくて。録林の群に入るぞと。汝もさぞかりつゝ。早く先非を悔。素の良民になるこそいと賢し。再なりとらんに我邸倉に入て。空へあげ。然るべき衣食の地を与へんぞるに。慇懃に説示されば。八郎も助をが忠言なれ涙を感し。君の仰示教まことに心根に徹し。いと忝くて

存じ候速に御回意を下。再び山へ還らじとハおもひ候へど。兄者ハ次郎
ぞも君の御仁徳を志らじ御示教の程ど御説諭し其悪気を改めさして。
御陣に召俱し参らんせんに頒くハ暫時の御暇を賜り。山に還らじ
まかバ此上の御恩ならんとおもひなれバ助重宗示とし涙ながらかたりてよく
討らひ候へとその望ミよまかし放ちて山へ還らじけり。庄平庄司ハ是をきゝて
諫めらハ彼輩ハ恩も義を知らざるものゆへ。いかで君の教に伏しまさん必ず
こゝに来るほど。若来るとも偽の謀をかまへ討ぢし賊ホが仇を報らんとハ
ざしとかゆに助まらち。大ひ我等ことハ知まりり。今彼を殺さんハいと易しと
いへど盗賊彼ホのよからぬ尚ながし。悉く誅せんとせバ我手の兵も多く
損ねべし。徳をもつて伏させ候ハ四方の賊自ら帰化すべし。八郎ハ伏させも兄
の次郎憤り御懐て再びこゝに来るべきなれバ。這回も頒くハ生捕にせよと宣

宿備をぞなしにける

第六編

孝子耕田して孝義を表す
勇夫山猟して邪悪を除く

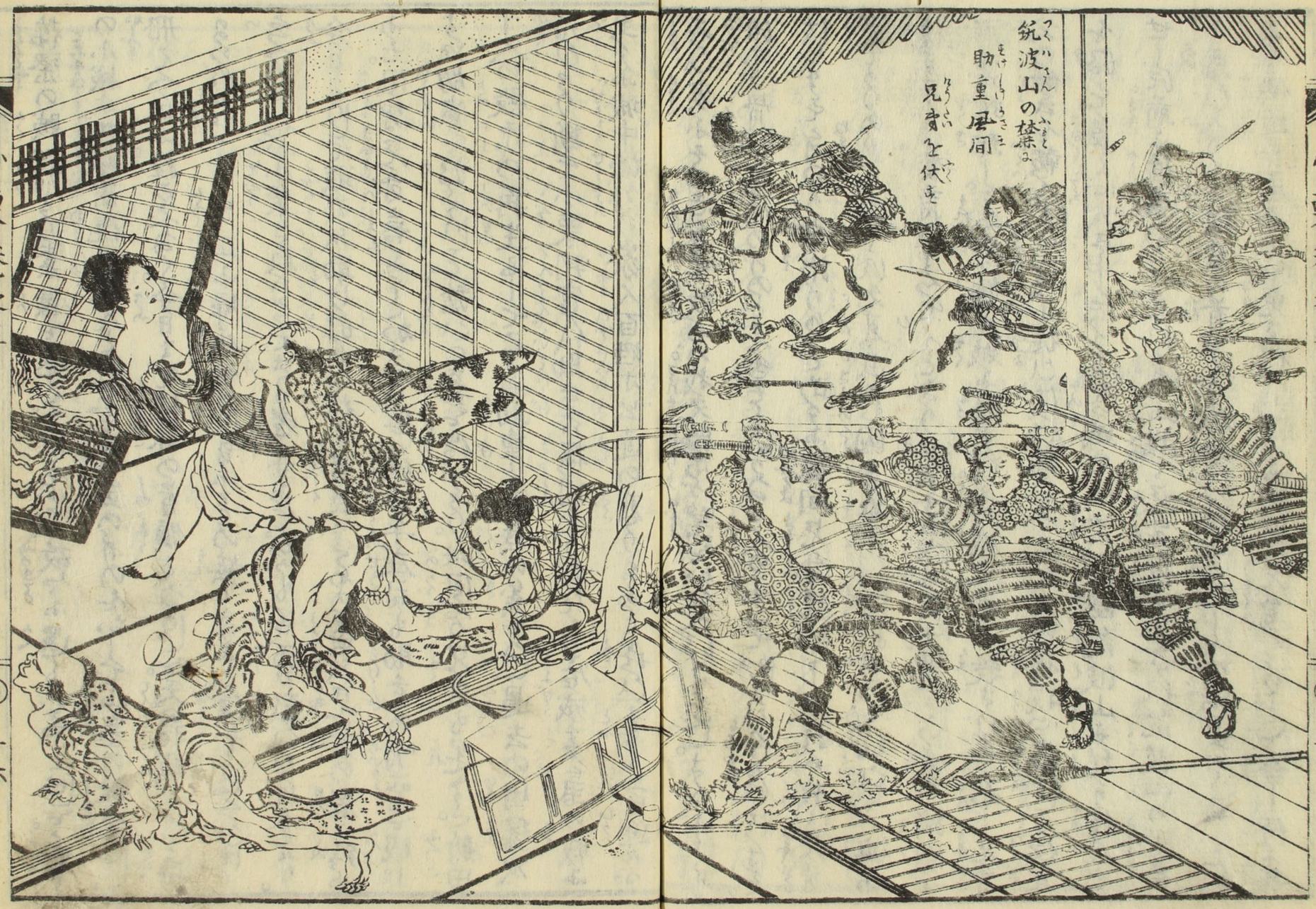
風間八郎正國ハ山塞に逃還り兄次郎に小栗が許らくくとぞ告へけれバ次郎
大に怒り我手下の者ハ渾て我を兼て寄しけれども其ものどもの五々く
討ほろぼされそのうへに知を歎せんと丈夫の所為るハ堂小栗ハ鬼神
なりともあれ此仇を報ずやと俄に手下の賊を催し小栗を夜討せんと
既に手配を定めけり然れども小栗が光景を知らずバ悪かりなんと小賊
を走らして窺わせけるに忽ち走かへりて申けるハ小栗ハ今宵八郎どの次郎殿を
待ひのふとて彼所で旅発ぞとて居りと報けれバ次郎ハ悦びのさらバ押
よせて討べしとて手下の賊数百人を將て山を下り射さバ後の方より寄さし。

おのれハ表の方より責入べしと。其勢と二手ふり。小栗が旅宿ハ表と後とお屋を定め。時ハ正よ初夜の比及すり。表と後とお屋を定め。時ハ大閑なるまでけり。旅宿の裡ハ寂として音もなし。次郎不審ハ急ハ下知して。門戸とうち毀し走せ入るハさらハ人影ぶこそ。ハ騙られぬと。俄ハ勢とう揚んと。すると。後背の山陰より閧代似て走出るものあり。是則小栗判官助重行。名乗かけつ。討てかれば。次郎小栗と。ゆとり歯切怒りと形し太刀を向ハ揮し。馬と抱せて走せ来れば。小栗完示とうち笑ひ。盗人のふるまひとなると。長刀を内かして迎人戦ふ。既ハ二十餘合ハ及ひ。次郎力労れ。今ハ勝べうとも。ハ刀を引いて走んとすれハ又一手軍馬出まして行先を遮り。是則池の庄司助長。次郎これとうて大ハ駆られ。何ハせんと躊躇ところと。庄司御と走入。ハと組ば。次郎ハ泥

ふと搦合しが。ハて支馬の間ハ撞と落すり。庄司力やはとりけん。ハ次郎を組敷ふ。此時数多の士卒ハ重て次郎を高ハ。ハ郷ふり。ハ又八郎ハ後の方より責入りしに。人影なれハ弱ハ。故の孫ハ中りぬと。急ハ出んとしふ。ハ郎ハ。ハ後の方ハ。池庄平百餘人の兵を率し開と揚て責かハ。八郎再び駆るに返し合して戦へども。乱ふ。ハ敵兵ども。いふハ制止ハと耳ハも。ハ聞ハ。散ふハ逃散ふ。八郎たゞ一騎庄平と戦居ふ。兵ども四方と囲と。逃とハと責ふ。八郎勇とふふて一方を斬ぬけ。表の方へ乗り出し。小栗助重ハ間なく行遭ふ。八郎これとうて馬を越て来る。ハを助ハ声ハ。約を背に信を失ふ賊早く郷と受ぶ。汝ハ兄次郎ハ。ハ前刻ハ生捕て我陣ハ。ハ郷ふ。と。ハ郷ふれば。八郎これとうて今ハ。ハ遁ハと。自害せんとふる。延と。大勢の兵ハ重て郷ふ。ハて

小栗は勝岡氏揚兵をまつあの本陣に罷越べし。風間兄弟を拘囚となして。小栗が前に牽居くれよう。其所判官代助重兄弟の郷と解免し。外生捕らる小賊ども皆酒食を与へて懇ろに饗し。其后風間兄弟に對し。我昨日八郎を擒にせしことよく教訓して罷越べしとぞ。今夜まりて俄に去るべこれ何の心ぞや。汝ふかうふるまひも天罰いなぞ。逃亡んとすべく外を狩。正民に帰きとそ賢れるまれ。八郎ふかうごく。衣食の地をば捨てんとあり。多く風間兄弟涙と流し。我く鈍て人を道と失ひ悪行しきると悪しとかもばかそ。再びかそ乃免と蒙る而已。ありがたき教訓を賜ること生涯恩ふかく忘れもせん。今日より幼稚改め君の臣となりていつまる賤き業をもし。九牛が一毛の恩に報ひまつん。然くは此事叶はじ。あひなんや。と生涙流て然ぎ申しゆる。助重

再び実ふその志を改めば。我又汝が望とかなうべきぞ。さるゆくも汝が骨柄忠信のものとこそ。そもいかくは今度はたはそ。はくまで身のうへを治りのことめるが風間兄弟謹ぐやけ彼は我く兄弟素よりの賊なあらば。元来武義國を奪ひ幼なくて母が後見。父の養育にうて人となり。兄は十五歳弟は十四歳とぞ。諸國を辟盗蜂起しくまが郷も賊が侵され。父は城の為に殺されぬ。家く兄弟父の敵を報んと。城に従ひ落ふとなど。賊将我心厳にして仮宜を設ぞ。兄弟心に思ひ。其城の体祭當國氣波山に移り住んとせしに前に強盗ありてこれと争ひ我く兄弟夜よりまぎれ氣波山の山塞に忍び入り。強盗の首とり梅祭の賊ども限りなくこれより側近く居ることを免されり。こゝもいて兄弟とりどと合し。終に其


筑波山の禁を
助重君間
兄貴を伏せ

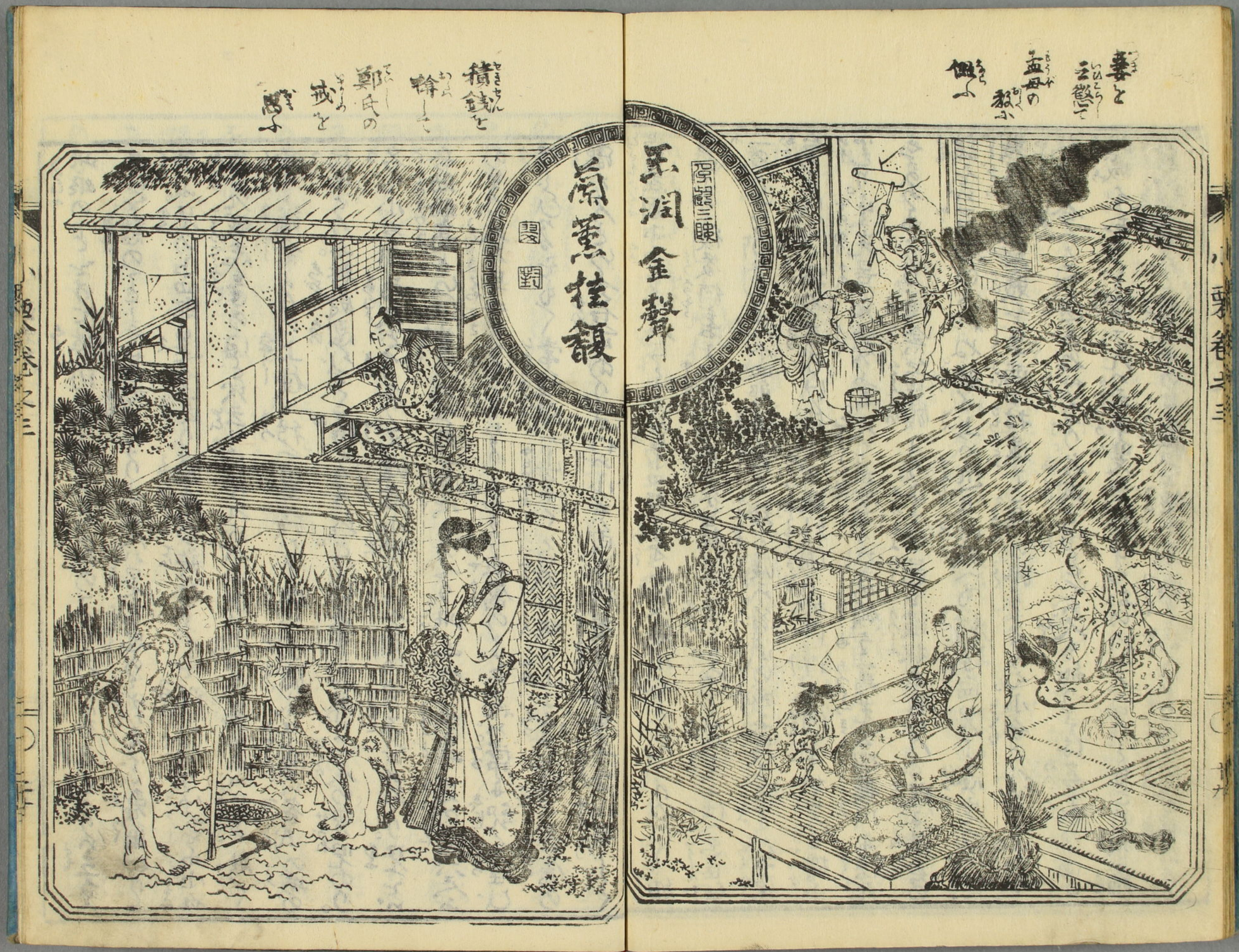
梅梁の賊を討とり。素懐を遂そぐりしをどふ。故々ふ還らざるをとせとる下の小城ふ。梅梁の伐を報んとへせど。兄弟のりのをおして。山塞の棟梁とし。冊をばふ詮をぐ。今日まで緑林の首領とるりしを天翁我々を捧のりぐ。君をして乗正ふ帰化せしめふとの嬉しさよと涙おしぬぐひたくをくりをれば。小栗さんれぐこそさる孝子ふて。おも義勇勢ひなる人とり。今日よりして我力ふ助けるをしれと。君臣ふるめの盃ふ兄弟の者と結ぶ。みぞ。風谷兄弟喜ぶとかぎりなし。池庄平。庄司も助重の明察を感じ。よふ朋輩をゆるうしと。歓びの宴を催しとり。此風谷兄弟も足まる。新田十人の殿ふの再生もしてこそ助重と君臣の義を固。過去の因縁ふて結びとり。斯て小栗判官代助重ふ梅川をうちたちて居城多賀の城ふ至るふ。城中城外の家人百姓ふ。公達の帰りのふと喜び。きく出て迎る。

判官代ハ城ふ入ける人心を歓ぶさんと。府庫ふある処の金銀米穀を出し。貧ふりのふ〻せ〻ぶ。ふ土地張ひ老少徒を賞し。公達ハ日本國の君〻ぶ。仁徳延喜の帝ふもおよぶ。又近國の強盗ふ助重の威ふ風聞兄弟ふて知つ。恐〻りのふ逃〻ぶ跡をかくし。仁慈を慕ふりのふ降参して。素の正民ふ帰化せしふ。當國の中ふハ盗賊絶てなく。夜とふ人ど戸ざしねどふ物ふ。ふりければ四民を業をやすんじ。国自ら富て民の竈も張ひ。小栗ハ此ふりのふ。公楽〻ぶ。ふざらぶ其光景をうんだやと。奢侈と称し城外ふ出て農家の体たらくを窺ふ荒〻る田もなく。塩見ふ家もつくぶ。公裡ふく喜なれ四方ふ徘徊ふ。ひ〻も二月のことなれば。春のめぐふ小田をたかへさんと。農民ふ田野ふ出て耕しるをふ農夫とある畔ふて午餐の

食具らしひくれ吹き居るあり。号とおぼしくてのの吹きどして只よ行ること客人と待遇ぐどし。小栗遥の岳よりこれを望着てふく貴驚。賤き身おて客人も及ばれをおもとの不思議さよ伺ぎぬうめる人と客者と傍ふ伺りるは村長ふ對ひ彼ふ何ちるりのおて名を伺とやぞと問れが村長遥でもう。彼ふ兄弟のりのおて。兄と加平郎とのひ兄と加浪郎とやひ。彼ぐ牧ふ加平とやひぐ。文流ことをよし。近辺ふ二分れ賻物おて。賢れ人と致ひぐ四十ことも子ふ兄ぐふ神や佛ふ祈アて。二人の子をまうけさふふつるぐよく教導して艱育ぐりね。彼ふいぐ初ふ兄射。隣家ふて餅を春々ふを。兄弟のふ供これをうて家ふ帰り。隣家ふ餅ふ春り。何の為ふ伺ぐやと。生母ふ問ふ母戯ふていふ泄ぐふ吹せんぐぐどとある。加平これを。妻と戒めて云ふ子ふ姪てふ。席の正なれふ居ふ割正なれ祝食ぐどとさふいふなれふ。兄弟潔りの心を知ふ。兄弟ふ云ふ懲し。餅ふ賣て二人の子ふ吹しふ又或時ふ兄弟ふ墻の壊ふを修理さふふ地ふ掘ること数尺ふて。数十ふ文の銭あり。加平が家素より寒家ふりしぐ。兄弟喜び父ふ祝と告ぐる。加平ぐ生ぐ居ぐどして云ぐりふ。甚ふ道ふ勤めどして禄ふ求ぐるぐふ尚禍の根ふりとして貧人ふいと危ふあり。ずして故ふして賊ふ求ぐるふ兄亡ぐるの本ふり。我ふおいていぐ足ふ取扱ぐやと。終ふ生坎ふ埋ぐたり。かぐる歳ふ教育ぐるわどふ。兄弟ふて父の教ふ守り。些ふ曲ぐる心ふ。その上文道ふ長ぐぐりね。然ぐるふ去年父母没命ふ。兄弟悲ぐる嘆ぐる。拘食ふて五日。形悴疲ぐる。小祥ふ及びても心の愁ふ忘れる。墓の傍ふ庐を結て三年まで居りね。生業ふ励ぐ。兄弟同居て

教養をすること。父母在時のごとし。日今公達のゆゑ〳〵あふぐごとくに。生平よりあるゆゑ。ふかくと感じ給へられば。小栗いよ〳〵感賞し。我采邑のうちに斯ごとく賢人のありけるものと。今日まで知らで過ゆくことの愚さよと。加左郎。加次郎とめして。金浪衣服をあたへ。其孝情を忠信なることを賞し。今より我に仕へんやと懇ねんごろに勧め給へば。兄弟は小栗の仁恵を感佩し。頃をうけて且賢君とうたてられば。終に身を委て。小栗の家臣となりぬ。是もまた前世の因とぞ。村田十人の忠臣再生して。奇偶して君臣となりぬ。小栗判官代助重の此国に下り。僅二年ばかりなれども。良老儻五人は如何ぞ。喜ぶこと限なし。不在話下再説義登小四郎は。主人伯従照天の跡を慕ひ。尋ね行くとて。生行悲を知ぬ。ぎりとぞ。今はやいかゝも詮なくて。一旦常陸に下り。身もめれば彼ともよく綾子。若も角もせんと。

常陸国に下りぬ。こゝに義登小四郎が孝に後義小介といへるものあり。幼なきより後義何事にも生られ。其家を嗣ぎて。兄とおなじく篤光に仕へ忠臣を二のなりなるゝ。兄小四郎は篤光に赴き。後は名武の城に残り留り。主家の島ふたよく城をもりけれども。一日城外に出しかり。何事からんと。櫓に光り。生光景紙窺ふに。人〻云ふ篤光公相模川に模死ありのあるより。遠会信頼より。生采邑を没収ありんと。既に遠会の鈴をば石めげられね。然る上は近日此城へも討手向ふこと必定なりと。城外の民家賊を東西に招運こと。勇の沸うごくに小介これを聞て大いに驚き。今はいかゝ逃まね秋なり。名武と呼ばれて人も知る名家なれば。此城をもあく渡さんは云甲斐なきなれども。おのれ一人なりともこの城に籠り終討死せんと。既にその兄悟を極めたり。熟〻思へば主人も一人の姫あり。


妻を
玉潤金聲
蘭薫桂馥
積錢を
鄭氏の
戒を

此姫のことをりて愁訴せバさそぶ名家のことなれバ家名ぞうい立うえ
りのと。懇のことして甚妨となりさらんハ足不忠のそゞなりと兎角おりふ
所ハ。兄の小四郎選りすぐり。藩金の餞たふくと洋ハ語りやさをハ小ゆ
致ゐ兄我志まのほど況云ゆこのれバ。小四郎も同志氣なのれバ。兄ハ社く
識て藩金ようの上使と行て異議なく城を明渡し。兄弟ハ名武の城の
尺わとりハ暫附忍びく居ゐ。ごゐて義釜小四郎と一人の男児あり。
名を小左郎為久と呼ゐ。又媛菊小助も兄弟の男子をりてり。兄ゐ
兵助助高といひ。弟と大八郎高次とゐり。此三人の少年分の丈六尺ハ
のまり。大力早業の勇者なり。まゐり血属のことなれバ常ハ祝く睦び
語ふひゐる。そもく常陸國ハ山ゆく名武の城も山ゆ近く既ハ玉簾の
瀧なんどいふ名所のされバ小左郎も。後菊兄弟も平生山猟しく

楽しことせり。一日いつものごとく。三人うち連玉簾の瀧の下とる山ゆく口兄
のゐり。終日狩くひしけるハ何の獲物もあくざりしうバ。公業まゐどして既ハ
家路ハ選ふんとする射いうハしてゐ小左郎。後菊兄弟をゐ失ひ一人蘇ハ
わらんとするハ忽ちゐ失て穴狩ハ墮さりこハ口惜と知んとすれど穴裡
闇して出べ穴方と知く探べ。暫附イ居ゐりしが。漸やくゐしてゐの明タく
ゐる方あり。さてハゐのよう出る道ありと見まゐして進ミ辺ハ幸て谷間
の所ハ出さりこゐにおゐて少く公安堵ど。何方ハ蘇ゐると弁ゐバ四方
を徘徊て道を索ハ一ツの細流ありこハよゐりのをゐ住ゐりのゐ招此水の
流ゐく方ゐて蘇ゐくハと岸辺ハ迫ゐ兄ゐハ。いと清ゐゐる流ゐハ。
ゐゐるゐうち俄ハ朱に灌くハゐ。赤ゐ水流れ来ゐれバこハ不審と添
の方をうちゐ兄ゐハ。怪ひゐる清く繊母ゐなハ小女の。血ハ流ゐれ衣を濯

居ろう。小太郎これをみて大きふ怪しこと。鳥も通らぬ山ふところふ。小女の居るを心を奪ね平く山鬼の類ぞ。我を騙うとおもはえうい。いでま捕ん。そこらんづと。小女が側ふ近寄れば。小女ふりかへりて小太郎をみ驚ひ走れおのれ。と。小太郎曙かうて引倒し。足下ふ蹈へ声をあらげ。汝いうるれ妖物ぞ。明白ふいへ。若偽るものならば忽ち撃殺さべしとのりたまふ。小女ハ戦く慄れ。ちど回恵なりてのりたまふ。澎めんでおそるくいうたまハ。奴家さらく妖物ならず。尚國を去る乃庄のものなるが。今去麻畠治ととて。途ふて盗賊ふ出遭ひ。此山ふ誘引まれる者なりと。小太郎嘆て此山ふ強盗ありとはいとべさてさることとよりはるとと。使なれとふ。忽起て塵うちはらひ。ゆゑ処実なるなるべ。細ふ我汝を助け出て。家ふ還らさべ。

山塞の光景を語るべしと。問かくもとば。小女この山の強盗を流用次郎とて。素ハ流用の盗賊なりしが。便宜のため近ハ此山ふ移住ハ。手下の小賊多三十人ばかりもいん。次郎ハ財宝を奪ふのみならず。容色麗しき女子をも奪ひ。おのれが妻ふ称ひ。をば妾とし。ちらざるをば京師ふ賣ることね。それをもこれをも辞めるをば。斬殺しなり。既ふ今日も一人の女子を斬て小袖を剥洗ハしをべるも。おんなの手の届りの人ふ方ふ。山塞ふ美麗のこと。わるハ逃れ出んねけ道の用ろく。次郎ハ身のとてより毒りのふをもふ。忍失ひ。ふ人きふ。とくとを去りの人爾ハ。れど彼用道の穴ハ。みぐるふ出入ると雑しこ。宅より南の方ふ常く出入る所ありてより逃出。多人奴家道ふ。べ。ふ。といへ。小太郎いざらハ案内さべ。汝をも供ふんといふ。小女ハ。ふ。志ハ喜しれど。次郎去日くる疵を負て。この

我どもハ家にのこし居れバ。若衆も此所を去がたし。強て走らバ奴家のこの子の
為にも悪かりなん奴家を不便とおもはゞからだ此まゝに捨置かひちくに
恙なく居るよしを父母に告よかしと答へて泣にぞ。小太郎これをうち聞
て頭を傾げ居たりしが。やゝありて云へりけるハ。嗚呼小女ハ似げなく賢き者
かな。いさく心を傾しぞ丈夫の言いかで空しかるべきや。我が為へきことあるに。
いざや南の道ハ数絡と小女が前に出行つ。渓間を行く幾程もなく総に
表門の下に出たり。此にておのぞ小太郎。小女をバ此所の所に還らし一人行く
東西を考居る所に一人の小賊出来しが。小太郎をみて大に驚き急ぎに
身を轉して家裡の方に走り入らんとするを。小太郎これを呼とめていへり
我ハいかなる物聞しさん。某ハ外療の醫師なりてもなくほかるが薬を採ん
為に今日此山に上りしにいかにしてや還る道を失へりよりてと語にぞ

足下に遭ずなかりせバ。捕に出べき道なかりしてたゞとありけれバ小賊医師
と聞て惶懼されおもひちし。立戻りて声を和げそこへいとより見えてくれし。
来くと足下が醫師におはさバ。我等こまるかことへ頼みありいかさまぞ此所に
待たまへめしそれ。労とも体ひまへと。強に誘引れよ。小太郎其案内に
まかせ行ければ忽ち大きなる家の前にぞ出ける小賊ハ小太郎が
一室なる所へ請し入暫時此所にまちて我再び出るを待まへと云つ奥へ
奥まりたる方に入りしに暫時ありて再び出来てはへは我等主人此程
怪我をなしそれバ治療せんとすれど邪る山中ことなれバ醫師なく
索るによしなく今日まで打過ぬにハ足下に不意尊る足下ちくとなるより
あるこそ幸なれ主人の病を療治してたまはんやと申すに小太郎を
山程わつと云ふ寒に入りぬと喜び。其某が生業のことなりいかにも

療治しやうねんせんと回意ふ。小賊共びいざなうと又一室うる所に誘ひり。
こゝに強盗の大将軍とおぼしく。身丈七尺ばかりにもおぼゆる大漢の顔色へ
炭焼の翁にてなく。眼は大きくして明星の光るごとく。鼻高く頬髭髪林い
手行る毬の毛と樅ごとし。実繪に写る鬼ひしとしく。恐ろしげ
なる錦の茵の上にあぐらうき美貌女子と七八人左右に居ふしたる後
ふに小山のごとき大漢十四五人も居並びうり。案内ちる小賊まとつうく。
大将めきたる漢ふに対し命ふまうし醫師を誘ひさふふと云へば。
其漢子小を郎とうちうなり不審げなるおりもして云くりはそこれへ
此山に住強盗の棟梁なり。紀間次郎といふりの。汝は醫師といるが仕
の地方れ人そ。小を郎恭しくれを見。某は此山の東なる禁の者なり
そばなり。棟梁症我しまふは。療治しやうふせんとうへば次郎再び

いうりるれは我此山に住と旧しうれば。彼所の禁あは何ぞの人あり。這方
の禁には再くの人ありとは聞ぬ。然ばいまご醫師居ること決ぐ
ゆめそ其上汝が術をうるふ。武夫の猟をるうさぶぐ猟夫まんどの如くうく。
さらうは医師めいるることを。其ぞして実ることを中せり。些とも偽るあらぶ。
忽ち斬殺すべしとのりるれふ。小を郎ひざと恐れ氣をしてこたへ
かくねは疑ひと蒙るりのうは凡て某採りのは深山幽谷ふるけ入ば或へ
猛き獣に出遭ひ。或は山氣の妖物に遭ふりのうとれを除くもさう矢
太刀なんとの武器めふぐしてはかるひぐに。倚てこる足ホの器を携へ
ねらうるう。某は原来出羽の国住者なるが此地方醫師少なれよりを
依人ゆゑ生業のうあ近比此山の東なる禁に移り住りさればこゝの山
不案内ゆて道に迷ひてとうに来るり足ホのことをよくいひ合しう。

山賊

偽なりと察しの人と実しやかふ欺たまへば。次郎うち笑ひ少しく疑ひの解しやや面を和ぶげさて云再わりはるかそれ急ぎ我此斑をよく療治の方を云べしと組きてえもとろふ肩の辺より腕をかけて刀ぬきて斬まねとおびゝたゞ斑なり。小太郎熟くとうちつえそいくりかえさ斑傷られてより日数経ぬれとおぼえ肉腐れ紅爛しつゝ。此腐れ肉を云去ぶこそ愈ぶしもられども此肉ぬきんとすれば其痛強く尋常の人にはとしといふ。次郎欺れねと云露知ぶ。その云所実もさあらぬ。ゝとおりひしぐこそ良醫師なりけりとふ絶こび。汝いかゞもこの此傷を愈くよと云へ。小太郎ぬきと喜び。拵柴の尋常の人よりさ移ぶよく痛をと忍びなりんが頑くに酒ぬ呑熟酔しまぐ沿療を施さるゝよしとのふ。さらば酒を呑んと。大杯ぬ引うけて續け呑ふ六七盃の酒を呑うり。次郎ぬ向ふると酔十分ふ生ぬく言もさどなく身を人自在ふうふねと寝ひ白布を乞ひ瘡傷ふは腕を巻くとえ〳〵ぬ忽ちうるまと小まに綁めうり。手下の盗人ぬこれを着て慌忙き立逃げゞ。小太郎声を高ふ呼ばして云うけるは我ぬ身醫師よめふぞ。義登小太郎為久といふ武夫なり。今日此山ぬ狩せしにさせは獲物もあらざるぞ。まと空ぬうして罷らんとするぬ不図強盗の巣穴ぬ吟ひ来たるぞ。庸猿の代ぬ此棟梁を生捕て土産ぬする所ぬ。若支ゆるりのわふば。すんば此次郎を斬殺し。甚次ぬ汝ぬとも殺さぞ。又神妙ぬ罷ふしなば。汝ぬ命ぬ助くるのうぬ。次郎が奉ひ貯ふは今浪賊宝殆りなく。渾汝ぬ今ぬとふとぞ。と呼ばりうれば。素より強欲鳥合の盗人ぬ小太郎が勇威ぬ懼れまて山塞の賊宝ぬ及といふ欲ぬわぐされ敵對者

さらはなし。たまく次郎を想ふのあれど。次郎は過失あることゝ成
憚りて生きゝどもいて小太郎又云くゝ此山塞に居る
女子を渾我々儀近辺良家の女児。此所を搦捕て其身をさら
なり。父母兄弟嘆死いつゝ方なし。さるに彼ども偖し行く。生家を
還くことゝ成妨せそといひけるも。前刺を案内知る小女成しく。
山塞にあるとあの女子を殘りなく集呼ども偖し既に山塞を出んと
あらりナれ。

小栗外傳卷之三終